

日中関係を考える——歴史からのアプローチ——

岡 本 隆 司

はじめに

（1）自己紹介

本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。実はこのような大勢の方は、あまり経験のないことです。で、けっこう足が震えている感じでございます。お手やわらかによろしく願っています。

いろいろ中国の、あるいは東アジアの歴史を勉強している者でございます。その一環といたしまして、日中関係のことも考えないではない、というスタンスでやらせていただいております。

まず自身の専門を自己紹介も兼ねまして、少しお話しいたします。わたしはイギリスとかアメリカとか、西洋諸国と中国との関係を主に勉強してきた者です。

そういう西洋諸国と中国との関係から見ますと、日本と中国の関係というのは、非常におもしろいというか、変な関係でございます。われわれは日本人ですので、どうしてもその立場と視角で、中国を考える癖があります。周囲にも日中関係を専門的に勉強される方がいらっしゃるのですけれども、わたしが変だと思ってしまうところにお気づきではないことがあります。

ですので、たとえば今日お越しのみなさまがイメージさ

れる日本と中国の関係とか、あるいは日本人から見た中国とは、少し違うような話になるかもしれません。そこはわたしの持ち味ということで、お許しをいただきたいと思えますし、少し今までとは違う見方というのを聞いて帰っていただけたら、むしろうれしく思います。よろしくお願ひ申し上げます。

本日、「日中関係を考える」ということでございますが、わたしのことでございますので、歴史しかお話ができません。そんな日中関係の歴史と申ししても、ずいぶん長うございます。けれどもやっぱり今、われわれが置かれている状況が、みなさまのご関心もあると思えますし、またさほど関心はなくても、否応なくそれに引きずられて生きていかねばならない立場でもありますので、そこにつながるような時期を中心に、お話しさせていただこうと思っております。

今日はわたし自身がせっかくお時間いただいておりますので、僭越ながら独断と偏見で進めさせていただきます。いろいろご異論はあるかと思いますが、その独断と偏見によりまして、現在につながっている日中関係というのは、だいたい一六世紀・一七世紀あたりから始まっております。

非常にざっくりというか、乱暴な言い方をしてしまえば、それ以前はどうでもよろしい、知らんでよろしい、という立場でございます。

それ以前は知らんでもよろしい、とわたしが言うのと、すごく傲慢に聞こえますが、実はそういうことを言った偉い先生がキチンといらつしやいまして、あくまで引用でございます。ですので一応、根も葉もないことではないということだけ、あらかじめ申し添えておきます。その偉い先生のこと、後でちょっと紹介したいと思えます。

です、話の本筋といたしましては、一六世紀あたりからお話をさせていただいて、それで目前、リアルタイムまで細かくやり出しますとキリがありませんので、だいたい二〇世紀の切りのいいところまで、お話をさせていただきますという形で、四つぐらいいに分ける感じでございます。ただ、なんば要らんといいまして、全く何もないではお話になりませんので、前史をゼロでつけます。

(2) 奇妙な関係

日中といえは変な関係である、ともう決めつけておりまして、先ほども奇妙な関係と言わせていただきました。

それで、その奇妙さです。「嫌い、嫌いも好きのうち」といいますが、仲悪いですわね、日本と中国は。世間もそうできて、わたしも出版社の人とお話しておりますと、最近、嫌中本でないと本が売れないそうです。中国の悪口を書かないと、本を書かせてもらえない……、さすがにそこまでではないですが、これは困ったな、と感じています。ちよつとマジメに中国のことを語ろうとなりますと、なかなかうまく広まらない、あるいは興味を持ってもらえない、そういう感じになります。

それは非常にゆゆしきことだと思えますが、わたし自身もよくよく胸に手を当てて中国のことを考えてみると、やっぱり中国はいけ好かんと思いますので、感情としては、だいたい世間並みです。

ただ、嫌いだから何も知らんでええ、とか、嫌いやから何でもええか、という、と、やっぱりそうじゃないとも思います。

「嫌い、嫌い」といいながら、日本人はたくさん中国に行っていますし、中国の人も「反日」「反日」といいながらたくさん来て、しかもたくさん買っていたいています。

わたしは京都に暮らしておりますので、観光客がものす

ごく増えたことを実感しております。だいたい聞こえてくるのは、中国語ですね。本当によくいらっしやいますし、またよく買って帰っていたいています。京都なんていうところは、観光でしか生きていけないような町ですから、非常にありがたい……。とは思いますが、やっぱりやかましいな、とも思いますので、なかなか感情は複雑なところ
です。

現在そういう形で、感情はあまりよろしくない。よろしくないながらも、関係はそんなに浅くない。これは日本人の感覚として、非常に奇妙であるとも思います。

ひところ前まで、「政冷経熱」というフレーズが流行っておりますして、とくに政治家とか、あるいは経済界、財界の人たちとか、よくこういう言い回しを使っていました。ですが、最近では聞かなくなりましたね。

もう当たり前だからなんでしょう。とすると、昔は常態じゃなかったわけですね。政治はどうも冷え切ったけれど、経済は熱いぜ、みたいなことで……。最近では当たり前ですから、誰も言わなくなっています。ですから、その状態が続いているんですね。

要するに、仲は悪いですが、何となく関係は深い、とい

う感じで受けとめていただいたらいいです。しかし、よくよく考えてみますと、日本と中国の関係は、歴史的に考えて、いつからそんなものになったのか、と商売柄わたしとはかと思っています。歴史しか知らない人種ですので、いろんな人と語っても、「何でこんなになったんですかね」と聞かれることが多いです。そんな時には、「いやいや、いまな^なった^なんではなくて、昔からこうでしたよ」とお話しするのが、このところ普通になってまいりました。

「自分自身は、何となく感覚で「昔からそうでしたよ」とか言うてたりしたのですが、そこはキチンと系統立てて、整理したほうがよいと思ひまして、近著で少しそういうことも書かせていただきました。⁽¹⁾

○ 前史

(1) 「日出づる処の天子」

日本と中国の仲が悪いというのは、一つには、やはりそれぞれの置かれた立場が違ふところに起因しているでしょう。向こうが住んでいるのは大陸で、面積はすごく広い。こっちは列島で、しかも山がちな列島で、非常に狭いところで、しかも海を隔てていますので、違ふといえ、それ

は全然ちがいます。考えてみれば当然の話なのですが、その違ふことをお互いがあまり意識していないようでした、これがそもその始まりになります。

パーセプション・ギャップでも申せばよいでしょうか。そのあたりをあらわす事例として、隋の煬帝をとりあげてみましょう。六世紀末から七世紀の中国の皇帝です。このころ、日本はまだ国ができていません。できてるのかわかってないのか、ようわからんような時期ではあります。

中国の記録を見ますと、その煬帝のところに、日本から使者がやってきた、とあります。これは日本でとても有名ですが、その使者がもってきた国書に「日出づる処の天子が、日没する処の天子にご機嫌うかがいに来た」と書いてあつて、煬帝が怒つたという話です。これ、何で怒るのかというのが、たとえば日本人がよくわからないことの一つです。

そもそもわからないから、そういうことをあえて書くわけです。キチンとわきまえていれば、そんな「日出づる処の天子」とか、「日没する処の天子」なんて書かないです。日本人は、今でもそうですが、中国を中心とした東アジアの常識というか、しきたりというか、そういうのに疎いし

いう特性があります。

中国は儒教とかが典型ですが、礼の国でございます。礼儀というのは頭を下げることで、はじめて成り立つわけですね。頭を下げるとは、どういうことかと申しますと、上下関係というのを設定するものでありまして、上下関係でしか物を考えられないのが、東アジアですね。非常に簡単に言ってしまうは、そういう形で秩序が成り立っている。

ところが日本人は、そのあたりのことが、ずっとよくわからない。今でもそうですね。礼儀作法とかいうのは、対人関係のレベルくらいなら、われわれもクドクド言うのですが、これが一步国の外へ出ると、どうもそうではなくなる。

「日出づる処の天子」「日没する処の天子」、これでは対等で肩を並べている、上下関係がない、無礼であるので、煬帝がお怒りになった。故意のしわざかもしれないですが、それにしても、大丈夫かと言いたくなるようなところではあります。

そういう日本と中国の元々の意識の違いですね。その意識というのは、単に頭の中だけではなくて、社会のつくり方であるとか、あるいは経済の成り立たせ方であるとか、

人が暮らしていく全てのことに影響しているということがございます。

(2) 遣唐使・日宋貿易

以後、日本と中国の歴史で非常に有名なのは、遣唐使でしようか。隋の後の中国の王朝が唐です。日本人は唐、辛子(トウガラシ)・唐黍(トウモロコシ)など、外国の物事はすべて「唐」というぐらいですので、日本人にとっては、非常に存在感のあることばでございます。

煬帝に続きまして、日本はその唐に使者を出しました。いわゆる遣唐使ですね。何遍も行っているのですが、何しに行くかといえますと、先進的な中国の文物を勉強しに行くというのが日本人の常識だと思います。ここが問題です。当の中国は、そんなことは何も考えていません。日本人が海を越えてやって来た、これは偉い皇帝に御機嫌うかがいに来たんだらう。ういやつ、ういやつ。そういうのが中国の意識です。遣唐使もそうですね。

この遣唐使、有名なわりにはあまり行っていません。七世紀から九世紀の間に、多く数えて二十回、内輪に見積もれば十数回くらい。国家事業ではありましたが、交流とい

う面からみると、さほど密度は高くありません。ここにもイメージとのギャップがあるでしょう。

唐の次が、宋という王朝です。ですが遣唐使は、九世紀の末で終わっておりまして、遣宋使というのはありません。史上には「日宋貿易」というのが知られておりまして、一世紀あたりになります。

宋という王朝は、実は当時、世界随一の物すごい経済大国でございました。宋の都の開封というところは、今でも町がちゃんとありますが、この当時、一世紀から一二世紀には、百万都市とか言われます。世界最大規模の大都市であったということでございます。それがいかに経済的に発展していたか、繁昌していたかを描いた絵・『清明上河図』も有名でございます。

そのころ日本といえは中世が始まるぐらいのところですので、経済格差といえますか、先進国と後発国といえはよいでしょう。日本は宋からいろいろいいものが欲しい、というところで貿易が始まりました。

日本としては、たとえば平清盛とか、鎌倉幕府とか、あるいは足利尊氏・直義兄弟の天龍寺船とかですね。日本はそういうのが続きまして、割と国家事業的に貿易をやるう

とします。ところが宋のほうは、政府はそんな日本の存在を知っているのか知らないのか。民間で単に貿易をやっている感じでした。

ですから遣唐使の頃よりは、交流の密度ははるかに上がっております。しかし民間・経済がベースですので、記録は多くありませんし、たとえば遣唐使よりも、一般の知名度は低いでしょう。ようやく研究レベルで、そのあたりの様相が明らかになってきております。

ともあれ日本と中国の関係が始まりますと、いろいろな事件・トピックがあります。それをとりあげるさい、あまり言われてない、気づかないことの一つに、日本と中国は同じことをやっても、お互いの考え方がまったく違う、あるいは認識が違う、ということがございます。

(3) 蒙古襲来

世界史という観点、つまり世界全体の歴史という点から申しますと、その大きな転換点は、どのあたりに設けられるのか。先ほど申し上げた一六・一七世紀は、一大転換点でございますが、それ以前にもう一つ転換点を設けよう、あるいは設定しろと言われたら、実は一四世紀あたりがそ

ういうことになるでしょうか。

その少し前に起こりましたのが「元寇」「蒙古襲来」、モンゴルが日本に攻めてきた事件です。

モンゴル帝国がユーラシアを制覇し、日本にも攻めてきた、それで日本はモンゴル軍を撃退した、という話で、とても有名な歴史的な事件です。が、当のモンゴル側とか、あるいは中国側はどんな意識だったのかというのは、まだまだ研究の余地がありまして、単に日本が攻めてきたのを防いだ、という単純な事情ではなさそうではございます。

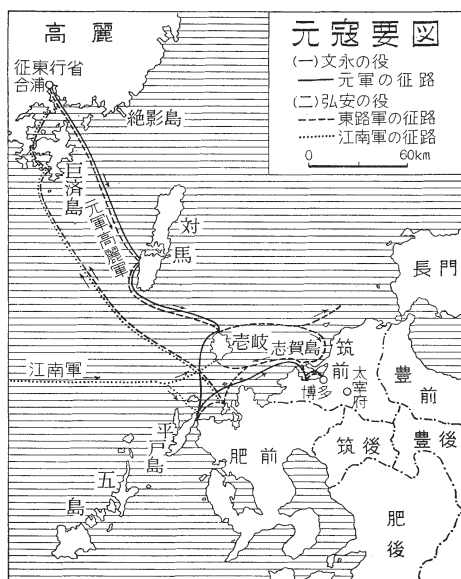


図1 元寇要図

出所：旗田巍著『元寇—蒙古帝国の内部事情—』(中公新書、1965年)112頁。

そのうちのひとつとして、元寇要図(図1)を掲げました。これは何の変哲もない歴史地図ですが、注意いただきたいのは、弘安の役のほう、モンゴル側の進軍が二方向あることです。

文永の役、それから弘安の役、両方とも朝鮮半島から九州のほうに攻めてきているのが一つございます。これは純軍事的な、あるいは政治的なアプローチという意味でございしますが、もうひとつは何やるな、という話です。規模としては、こちらのほうが多数の人がおりまして、中国の南方・長江流域の江南からやってきた、ということですよ。

この事情はよくわかっています。一説によると、十万人規模で来たといわれています。まさか十万人全部が戦闘員とは考えられない、ということで、移民団ではないか、日本に移民させるのでは、とそういう説もあるぐらいです。この江南軍はよくわかりません。

何を申し上げたいかと申しますと、中国は広々ございますので、北と南で考えること、やっていることが違うというわけです。たとえば、元寇の地図から、そのあたりがうかがえます。

中国の北と南といえますのは、中国史全体の永遠の

テーマと申しますか、この構図をわからないと、なかなか中国が理解できないところがあります。今の中国の人たちも、北方人と南方人とは全然違うという認識です。これはよく言われるところではございますが、歴史的事件の「蒙古襲来」一つとっても、そういう事情がよく出ている、とお考えいただけたらよいのではないかと思います。

一 関係のはじまり

(1) 明朝という政権

それで、そのモンゴル帝国が減びますが一四世紀の後半です。実はその一四世紀の後半と申しますのは、地球寒冷化の時代です。実は今、地球は温暖化まっしぐらで、きょうも暑いですし、数日前も暑かったですが、それとはちょうど逆の寒冷化が襲っておりまして。寒くなると、これは冬にインフルエンザが流行るのと同じでございます、疫病とかが蔓延する。もちろん生物の生存力も落ちる。要するに天災・不作、そして不況という時代になって、これは地球規模で、大ダメージを与えました。このあたり、今や世界史の通説になっております。

日本史でも、南北朝時代は寒かったらしいですね。鎌倉

幕府もそれで倒れたという説があります。⁽⁴⁾大陸も内陸部はものすごく寒いですから、非常にダメージが大きかったと言われております。

ですから、内陸の草原地帯を本拠にするモンゴル帝国は、そのダメージからバラバラになりました、世界全体が大混乱に陥りました。そんな中で、中国のほうででき上がりましたのは明朝という政権です。「明朝体」という活字・書体がありますが、その明朝でございます。

掲げましたのは、わたしがつくった明朝のイメージ(図2)です。この説明からはじめましょう。

今、中国・北京に旅行なさいますと、必ず万里の長城とかのツアーに行かはるかと思えます。万里の長城というと、秦の始皇帝が造った、と世界史の授業とかで習います。それは別に間違いじゃないですけど、ここではあえて間違いだと申します。

今われわれが知っている万里の長城は、秦の始皇帝が造ったものではありません。これができたのは、明朝の時です。何のためか。「長城」といいますが、要するに、壁です。ね。「ベルリンの壁」と一緒で、通せんぼです。要するに、ここをピシャッとシャッターを閉めるわけです。

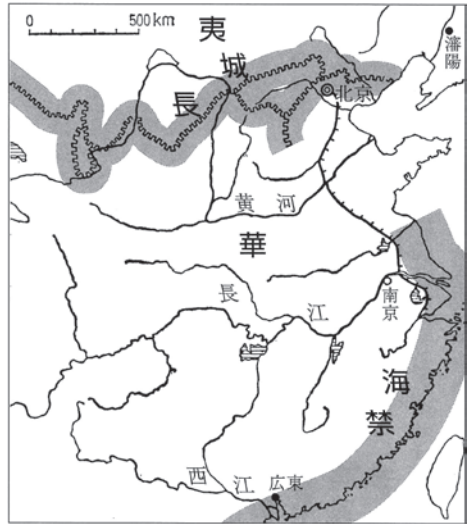


図2 明朝の版図

出所：拙著『中国「反日」の源流』（講談社選書メチエ、2011年）41頁。

シッターは陸のほうだけかというところではなく、海岸も実は同じでした。海禁といいますが、海と交通を遮断するといふ、日本風にいいますと鎖国ですね。そういうことをやります。

先ほども申しましたが、中国では上と下というのが秩序の基本。当然、文明が進んでいる中国が上、そのほか周辺は劣っているから下、というのが基本的な認識・意識でして、秩序の基本でございます。

ただ、そう思っているだけだったら、別によいのです。

現実はいろいろな力関係もあれば、いろいろ妥協することもありますので、中国史でもこの基本的な認識・秩序が、完全に実現したことはありません。

ところが、この明という王朝は、非常にエキセントリックといえますか、おもしろい。おもしろいうちの一人が、有名な永楽帝ですね。そのお父さん、太祖・洪武帝がさらにおもしろくて、ゴリゴリのおっさんです。この親子で明朝の対外秩序のありようを決めました。

上・下という垂直関係を平面的・空間的に置き直しますと、華・夷になります。中華と夷狄。要するに中央と周辺、文明人と野蛮人ということです。文明人は偉いに決まっていますから、華・夷は上下関係とまったく同じです。そういう秩序で成り立っておって、だから劣っている下の野蛮人は、中華の皇帝をリスベクトしなさい、キチンと貢ぎ物を持って挨拶に来なさい、それしか交流、交際は認めません、と言っています。それをわれわれの学界では、たとえば「朝貢一元体制」と呼んでいます。⁽⁵⁾

(2) 「朝貢一元体制」と日本

「朝貢」と漢語でいうと、何か難しいですが、普通われ

われがやっていることです。手土産もってご挨拶に伺うという行為ですね。ご挨拶に手ぶらではいけませんので、手土産を持っていくわけです。普通にやっていることで、人間関係ならそれでいいわけです。ですが、それを国の規模にまで扱いますと、どうなるか。

明朝の「朝貢一元体制」とは、要するに対外関係の手続は、その朝貢だけにした、ということ、このあたりがエキセントリックですね。もちろん、ですから貿易もなし、何もなし、朝貢だけ。周辺・外夷が手土産持って、皇帝・中華にご挨拶に伺う、もっぱらそれだけで秩序を作るんだ、というわけで、キチンとご挨拶に来たら、シャッターを少し開けてあげます、というのが明朝のやり方でした。

言うことを聴かんヤツは、腕づくで言うことを聴かせようということ、一生懸命モンゴルのほうに遠征をしたのが永楽帝でして、かれは海のほうにも、大艦隊を派遣しています。鄭和の遠征ですね。いずれも、とても有名です。

この当時は、日本は足利幕府でございます。そういう「朝貢一元体制」をどうするかと対処を迫られ、しようがないので、ご挨拶に行きましようか、という形で関係を持ったのが足利義満でありました。

しかし非難轟々でした。どういうことかと申しますと、中華の皇帝が偉い、というので、頭を下げに行ったのに対し、日本では、お公家さんとか、みんな怒ったのです。中国に頭を下げるのは許しがたい、隋の煬帝のときもそうでしたが、中国とは何か対等やと思ってるんですね。東アジア・中国の視点からみますと、足利義満はけっこうアジアの常識を知ってるんですけども、それをやると、日本では怒られる。そういう日中のギャップがここにも影響した、みたいな感じで考えていただけるとよいと思います。

朝貢の関係といいますと、貢ぎ物を持ってご挨拶へ行つて、ご挨拶して頭を下げる、ということは、要するに臣礼をとる。臣従するわけでして、非常に卑近な言い方をしてしまえば、永楽帝の家来に足利義満がなる、ということなので、ですから、それはいくら何でも、と考えるのが日本人です。天皇もいるのに……、というようなことです。

日本人はどうやらそれを見たくない、ということがございます。このあたりのことを日本史はどう教えているかと申しますと、「勘合貿易」ですね。みなさまもたぶん聞いたことがあると思います。

勘合というのは、当時、貢ぎ物を持ってご挨拶に伺いま

す、という時に、そういう使節ですよ、ということを示すための証明書、IDです。ですから、そんなIDを貿易の名称にするなんて、わたしから見ると、非常に奇妙なネーミングです。「勘合貿易」とかいうのは、朝貢・臣従した、という実態をごまかしたものでして、日本人はそういう癖がありますね。何か物事の実態をすりかえるようなことをやります。ともかく中国から見ると、日本は足利義満が「朝貢二元体制」に入つて、明朝に臣従をしたということにほかなりません。

でも、義満は息子と仲が悪かった。その義持が、オヤジのやつてゐることはけしからん、といつて関係を解消することになりますので、結局のところ、日本人が明朝の「朝貢一元体制」に入つたのは、ごくごくわずかな期間のみでした。

ほかのアジア諸国は、いろんなバリエーションはありますが、明朝は強いですし、穏便にすませようか、みたいなことで、不本意でもだいたい言うことを聴くんです。特に朝鮮半島は隣り合っていますから、言うこと聴かんと何されるかわからん、みたいなことがありますので、いつそうそうなります。日本人はそういう点、全然パフォーマンス

の仕方が違うわけです。

(3) 江南の工業化と「倭寇」

ただ、今まで申し上げましたのは政治的な、つまり中国全体で言いますと、北の動きですね。この永楽帝もそうですが、北京にいます。北の政治的な、のみでそういうふうをやつてゐるんですけれども、先ほど申し上げたように、中国は北と南でやつてゐること、考えることが違います。

地図(図3)はその南のほうでございます。一五世紀・一六世紀あたりでして、上海という、いま中国で屈指の大都市ですが、それがまだできていませんで、このころの中心都市は、蘇州という町でございます。当時の蘇州の経済力が、後に海岸にまで行きついて上海になる、とお考えいただければ、わかりやすいかなと思いますね。ちょうど中世の京都が、近世になると、大坂になるみたいな、そんなイメージで考えていただけるといいかな、と思います。

この地図は何を書いているかと申しますと、このあたりは一五世紀・一六世紀あたりに工業化を果たしました。工業化と申しまして、もちろん機械で何かつくるようになったという意味ではありません。人力・手工業なのは

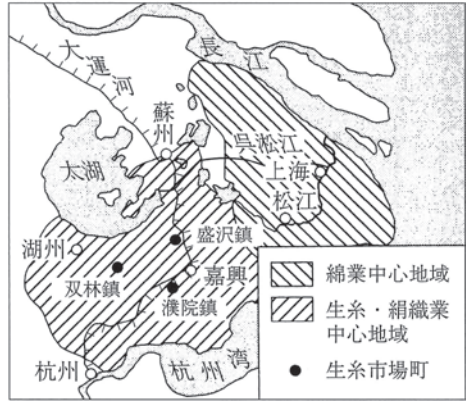


図3 江南デルタ

出所：拙著『中国「反日」の源流』43頁(岸本美緒「東アジアの「近世」」山川出版社、1988年、29頁をやや改変)。

ありますが、ものづくりが非常に発達しました。

何かと申しますと、木綿と絹です。この当時、木綿と絹をつくれるのは、世界で中国とインドしかありませんでした。ここが実はポイントです。絹はほんまに、中国だけです。ローマ時代の昔から、中国は絹の国、セリカと言われるような国でございましたが、それがここで極度に発展をいたし、世界で少ししかできないですから、世界中の垂涎的になりまして、みんな貿易をしたい、といって群がってくるわけです。

一六世紀と申しますと、日本はちょうど「南蛮渡来」でございまして、世界的には、大航海時代と申します。貿易をしたいのは外国だけではなくて、もちろん物をつくったらやっぱり売りたいので、中国の人たちも当然のことながら貿易をしたい、となってくるわけです。

そういったしますと、この上のシャッターを閉めた地図と、それから下の工業地帯、それから世界とのギャップ、あるいは矛盾が非常にあらわになってまいります。それで何が起こったかと申しますと、「倭寇」という現象です。

「倭寇」は日本の海賊というぐらいの漢字の意味でございます。もちろん日本人は貿易がしたいけれども、思うように貿易させてくれへんで暴れる、という形になるわけですが、ただそれは、単に日本人だけがそうだったかというのと、さにあらず。南蛮人とか、いろんな人たちがそこには交じっております。それから大陸沿岸にも、強力な受け入れ態勢があります。中国の人々も貿易がしたかったのです。で、「倭寇」という表現は実にざっくりとしたイメージだけです。いろんな人たちがいた、というのが通説でございます。

(4) 大航海時代と日本の勃興

世界地図(図4)を掲げております。その矢印はご覧のとおり、銀貨です。当時の銀といえますと、今のわれわれで言いますと、アメリカ・ドルみたいなもので、世界中

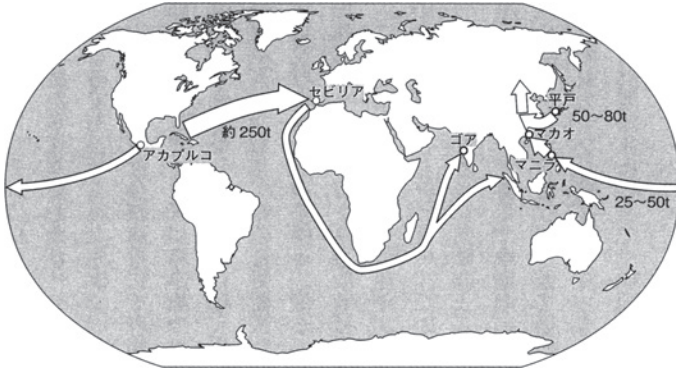


図4 1600年前後の銀の移動

出所：拙著『中国「反日」の源流』48頁。

どこでも通用する外貨です。その銀、アメリカ大陸が「発見」され、そこからザクザク出てきたという話ですから、新大陸を見つけたヨーロッパ人が急に成金になって物が買えるようになった。じゃあ、一番欲しいものを買おうかと、中国とかインドの物産を買うために持っていったというのが一つの矢印です。

ところが、もう一つ矢印がついています。これは小さいですから、表現するのに苦労しまして、短いのですが、それは日本から相当の量が中国に向かっているということをおわかりいただきたいわけです。

中国は当時、「銀の墓場」といわれています。ブラックホールのように銀を吸い込んで、もう出てこない、みたいなことです。それは中国に生産力があつたということでもあるわけです。

その日本ですが、当時の日本は戦国時代ですね。戦国時代・下剋上、それから近世の日本ということで、だいたい一まとめで考えることができます。一言でいいますと、大変な経済成長の時代です。

戦国時代から江戸時代にかけて、これは非常にざっくりした計算ですが、日本の人口は三倍になります。グラフ

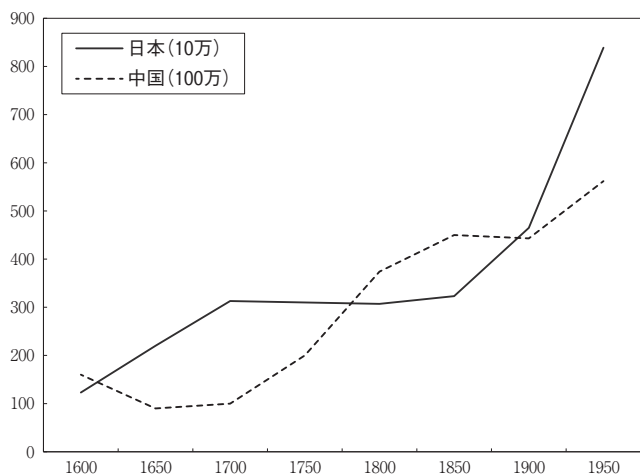


図5 日中の人口動態

出所：拙著『中国「反日」の源流』64頁（鬼頭宏著『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫、2000年、16-17頁、姜濤著『中国近代人口史』浙江人民出版社、1993年、122頁）。

（図5）をご覧いただいたらわかりやすいと思いますが、大変な人口増加です。人口増加を支えるべく、当然のことながら生産が増加をしています。生産量を増やそうと思いますが、当時主要な産業は農業ですから、当然のことながら耕地を増やさないといけない。耕地はどうやって増やす

か、日本みたいな土地のないところでどうするかと申しますと、今まで住んでなかったところを開発することになります。その住んでなかったところは、どこかと申しますと、海沿いです。

人間はどうも湿地・沮洳地、つまりベチャベチャしているところには住みたくない。それはみんなそうですけれども、海沿いの沖積平野なら、技術があつて排水さえできれば、水田に変わり、それでお米ができます。お米ができれば、たくさんのお米が養えます。日本の場合、やっとそれが可能になったわけです。

水位が低いところに水田が造成できるようになったのが、この時代ですが、それは当然、土木技術とかが必要になります。戦国時代、豊臣秀吉とかが土木狂といいますが、城攻めするのにダムを建てた、なんてことがありますか、あれは有名になった、ごく一部の事象でして、むしろ日本全体があんな感じで、大変革です。今の日本の都市とか農村のベースができ上がったのは、このときですね。

海外貿易と経済発展で、日本列島もこの時期、まったく相貌を一新させたというわけです。

二 成熟

(1) 下剋上と「倭寇」の構造

ですから、はじめに申しましたように、偉い先生が以後の日本は、それまでとは違う国だ、と言わりました。その先生が内藤湖南です。それ以前は別に知らんでもよろしい、と言うてはる。応仁の乱でガラツと変わった、と言わった人⁽⁶⁾で、これはたいへん影響を与えたといえますか、わたしも同じ時代を勉強していますので、なるほどなと思うことが多々あります。

内藤湖南は日本研究家であり中国史の専門家でもある人ですが、中国のほうはそれほどキチンと言うてくれはりませんでした。日本史のほうばかり。

わたしは中国も、たぶん同じようなことが言えるんだろうと思っています。つまり一五・一六世紀の中国は、先ほどの南北の違い、あるいはお上の政治と下々の経済が全く分岐してくる、そういう時代でありました。

とにかく明朝は「固い」といいますか、まったく柔軟性がない感じの政権で、世の中の動きについていけない観がございます。政策は全然かわってないですね。政策は

変わらないのに、民間の経済はどんどん経済成長していった、貿易をしたけれど貿易は許さん、という感じになって、倭寇とかいろんなことが起こってくる。そのいろんな民間の交流の中で、日本の経済成長も生まれてくる。

さきほど少し申し上げました下剋上、さきほどの偉い内藤湖南という人は、これは単にヒラ社員が部長を蹴落としたというばかりではなく、もつとスケールの大きい、下層民が、それまで支配階級だった上層の連中全体を撃滅した、日本の名もない平民がこぞって力をつけて、それで名もない平民たちが主役になっていったことなんだ、と定義づけます。

ですから、徳川家康とかもそのうちの一人かもしれない。典型的なのは豊臣秀吉です。戦国大名というのは、下層から成り上がっていくパターンですが、これではなかなか秩序が安定しないので、大きな領主権力が身分制を設けて、何とか平和にしましょう、とできたのが徳川幕府や、とわたしなどは思っております。

何を申し上げたいかと申しますと、中国の場合は、上と下、政治と経済、北方と南方がバラバラになってきているのに対し、日本のほうは生産・技術とかを含めて、下層民

が非常に活躍をし、下層民が一元的な政治権力、経済主体をこしらえてくる。それが戦国当時に起こってきた、という事でございます。

一六世紀から一七世紀にかけての日中それぞれのパフォーマンスと申しますのは、同じ大航海時代、同じ経済成長をしてはいて、貿易関係は深まっています。が、かたや政治と経済が離れていく、かたや社会主体の一体化と下廻上ですから上も下も全部一体になる。そうやって、日中のありようが全然ちがうようになってきて、それが顕在化してくるのがこの時代でして、それが出発点になります。ただ、そんな互いにどうも違うという事情が「倭寇」という形であらわれて、仲が悪くなってくるようになります。と、やっぱり、ちよつと関係を修復したほうがええんと違うか、となつてきます。

(2) 江戸開府と明清交代

一七世紀になりますと、日本と中国ではそれぞれ、政権が交代をいたします。とにかくエネルギー過ぎた豊臣秀吉、朝鮮出兵とかいうけつたいなことをやるような政権が倒れて、もうちよつと常識のある徳川家康がとりあえず

政権を握る、ということになったのが日本の局面です。

かたや中国のほうは明清交代と申します。明朝から清朝に政権が移りました。

清朝は、当時の中国からすると、マイノリティーでございました。満洲人たちがつくった政権です。その清朝というのは、明朝に比べますとよほど常識的でマジメな人たち、よほどリアリストでございます。

日本との関係でいえば、どんな関係を構築すればよいか、をマジメに考えました。どうも日本との経済関係は重要そうだから、これはキチンとやらなければいけない、ただ、ヘタに政治的に手を出すと、「倭寇」みたいに暴れるかもしれないので、日本人には来てほしくない。来るな、ということですが、日本と経済的な縁は切れへんで、ということ、中国のほうから、「爆買い」ではないですが、日本のものを買いに来る。もちろん売るものを持って来てのことです。

先ほども少し見ましたように、中国が日本から欲しいのは銀でした。と申しましたが、日本の銀も無尽蔵にあるわけではないので、江戸時代に入りますと、だんだんなくなつてきます。そしたら何が欲しいかという、今度は銅

です。銅もしかしながら、中国の需要を満たすほどありません。日本も出し渋るようになりますと、今度は海産物。フカヒレとか、中華料理では、大事なものです。日本は海に囲まれた漁業の国でもありますから、ああいうものを貿易するようになりました。

銀から銅、銅から海産物ですので、だんだん価格も減ってきています。江戸時代通じてそんな感じでございます、日本と中国の経済関係は、一九世紀になると希薄になっていくのがトレンドです。

(3) 「鎖国」と長崎貿易

そういうのを日本は「鎖国」と言っています。その「鎖国」の唯一開かれた窓口になっていたのが長崎でございます。ただ長崎と申しますと、出島ばかりですね。オランダ・西洋が関わるからか、出島ばかりなんです。今、注目していただきたいのは、そちらではなく、「唐人屋敷」つまり中国からやってくる人たちが住んでいるところです。日本は当時、「鎖国」していましたが、当り前ですが、チャイナタウンがあったのは、ここだけです。今、世界的にチャイナタウンがありますし、日本も神戸とか横浜とか

に中華街があります。これは近代になってからできたものです。つまり日本が「開国」をして、アメリカとか西洋人に港を開いたんですが、それについてきて中国の人々もやってきて、横浜とか神戸とかに住むところをつくったのが、今の中華街です。

長崎は違います。もともとここに中華街があります。でも、今は遺構しか残っていません。別のところにみんな引越しました。ですので長崎のチャイナタウンは、ほかのところとは違う趣がありまして、結構おもしろいです。

ただ、長崎と中国との貿易は、だんだん減ってきます。貿易の関係ですから、北の政府とか政治は絡まない。南のほうの、古くから日本と関係を持っていた寧波（ニンポー）という町ですね。後、近代になりますと、長崎と上海が航路を結びまして、「長崎県上海市」みたいな言葉があったぐらい、行き来が盛んにありました。

実は上海というのは、寧波の人たちがつくった都市でもあるので、そういう意味で、南方中国と長崎は、実に縁が深いです。何百年ものスパンでありますから。ただ当時、貿易自体は衰退してまいります。

(4) 近世日本と中国

ところが中国は、日本との貿易が衰退した一八世紀になりますと、爆発的な人口増加をしております(前掲図5)。日本は一七世紀に三倍になりました人口が、一八世紀になりますと、これがたぶん臨界点になります、日本列島で支えられる人口、その当時の技術とか。ずっと横ばいになって臨界点に達したわけですが、中国のほうは同じ時期に三倍、四倍に人口が増えている。

日本と中国は、人口規模とか何でもそうですが、日本の十倍が中国だと思っていたらよろしいかと思えます。いま日本の人口が一億二千万か三千万ぐらい。中国は十三億ですね。大体そんなもん、昔もそうです。

一六世紀あたりは、日本は一千万で、中国が一億、それが一七世紀になりますと、日本は三千万になって、一八世紀、一九世紀になると中国は三億、四億という感じになってくる。

ただそのトレンドが、このグラフでもわかりますように、同じ歩調で進まないというのが、日本と中国の関係を象徴しているようでもあります。全然ちがう方向を向いている、という感じでご理解いただけるとよいのではないでしょう

か。

日本は「鎖国」の時代です。同じ時期、中国は貿易を続けていました。それこそ、前掲の地図(図4)のままです。このパターンの貿易をずっとやってきました。日本から銀が入ってこなくなっただけです。一八世紀になりましたも、こういう形で一貫して、銀が流入しつづけていました。

誰が持ってきたかという点、今度は日本人ではなくて西洋人、とりわけイギリス。産業革命ですね。イギリスも経済発展をしています。その経済発展のプロセスの一環として、お茶を飲むように、喫茶の風習ができるようになってたのが、その当時のイギリスです。爆発的に中国のお茶を買って、それまでも中国の特産品、生糸だとか陶磁器だとかを買っていましたが、それ以前は物の数ではないほど、お茶をたくさん買うようになりました。茶というのも特産品、当時は中国にしかできないものでした。

同じ時期、日本もやはり中国と貿易をやってはいました。銀がザクザク出てきたころは、中国から貴金属でモノを買ってりやそれでよかったです。銀がなくなると買えない。

日本人はしようがないので、中国にあるものは自分らで

つくりましようかという話になってきました。江戸時代に一生懸命みんな苦勞をして、お茶を宇治とか静岡でつくるようになり、木綿も中国からもつてつくるようになり、絹も信州だとか群馬とかでつくるようになったというのが、江戸時代の経済トレンドであります。輸入代替化と申しませんが、日本の「鎖国」の本質は、そういうことだといわれています。

先ほど申しました、貿易の衰退、中国と貿易しなくなったのを逆に言いますと、する必要がなくなった、ということでもあります。全部自前で調達できるようになりました。それはヨーロッパ人の欲しいものと同じですから、日本が「開国」をすると日本の目玉的な輸出品になりました。そのなれの果てが、世界遺産になった富岡製糸場などです。

輸入代替とかいいますけれど、日本人自身はなかなか気がつかないんですね。なぜかといいますと、中国との関係はなかなか視野に入らなかつた。民間ベースで向こうからやってくるだけ、ということでしたので、気づきにくいんですけれども、今日の研究水準では、輸入代替とかそういう話は当たり前になってきておりますので、ぜひみなさまにも知っていただきたいところです。

三 転換

(1) 「西洋の衝撃」と日中

一九世紀に入ります。日本も中国も同じく「西洋の衝撃（ウエスタン・インパクト）」の時代です。日本では「黒船」来航、中国ではアヘン戦争となります。一九世紀の半ばです。

ただ日本の場合、ほんとうに突如、黒船がやってきたという感じですが、中国は先ほども申しましたが、景気が上がって人口も爆発的に増加したのも、イギリスとかの西洋との貿易のおかげです。ずっと貿易をやっています、日本みたいに全然没交渉だったのが、急に交際をやり始めたというわけではありません。しかしながら、中国のほうも西洋と政治的な関係を結んだのは、確かにこのときが初めてです。

ですので、何か日本と中国は同じ「西洋の衝撃」を受けて、同じように「開国」した。一方は近代化が成功して、一方はあまり成功しなかつたような感じで語られると、それはおかしい、違います。といいますか、それは少し話が違つるように理解をしたほうが、いいのではないかと思つて

います。

先ほども申しましたように、中国はそれまでからずっと、西洋諸国と關係を持つて貿易をやつておりましたので、そのプロセスでトラブルも起こります。仲が悪くなつたりもします。その大きなものが、たとえばアヘン戦争ですね。

それならアヘン戦争などは、とにかく今までやつてきたことで、ちよつとトラブルが起こつただけ、それまでの關係を別に根柢から改める必要はないやんか、というわけです。根柢から改める必要はないんやから、それまでと同じような感じでやつていけばよろしい、というのが中国側のスタンスです。だから中国のほうとしては、それほど変わったという自己認識はありません。あるいは客觀的にみた情勢としても、一八世紀と一九世紀とはあまり変わっていないです。

ところが日本の場合には、江戸時代の「鎖国」と明治の「開国」、両者をあまりにもバチツと分けると正確さを欠きますけれども、それまで没交渉だった西洋と交渉を持つようになつて、日本の国そのものがガラツと変わった、ということ自体は事実ですね。これは實際ガラツと変えざるを得なかつたわけです。

中国の場合には、西洋と經濟關係を持ちます。けど、政治は別のところがやる。先ほど申し上げた北方と南方ですね。なので、南の方でゴチャゴチャ西洋と何かやつて、それでトラブルが起こつても、北の方あるいは政治は、別に姿勢を変えなくても何とかなるんですね。

ところが日本は一体ですから、西洋と關係持つて、それでは都合が悪くなつてくる、となりますと、全体がガラツと変わらないとおさまりがつかないような社会になつていたのです。

日本と中国というのは、はっきり言いますと、日本は近代化に成功したのではなくて、近代化せんと、にっちもさっちもいかんようになったという感じですよ。それに対し、中国のほうは、別に近代化せんでも、それまでのやり方で別にええやん、みたいな感じで余裕があつたと捉えることができます。

(2) 明治維新と日中關係

それで日本は西洋のやり方を学ばないと、やらないと、というように、みんな一丸となつて走り始めました。それが明治維新です。

そういたしますと、それまで政治抜き、経済関係だけでやっていた日中関係では、日本人はおさまりがつかなくなると。中国とも西洋流にキチンと国交・条約を結んで、キチンと西洋流のつき合いをしないと、西洋と関わり、肩を並べることはできない、という強迫観念に駆られて、中国にアプローチをしに行く。ということ、中国との新しい関係が始まることになってまいります。

細かく言い出しますとキリがないので、年表風に主要な事件を挙げます。わたし、年表は大嫌いでございます、年号を覚えるのは大の苦手。ですから、歴史は好きだったんですが、歴史の授業は大嫌いでした……。ともかく、説明だけいたします。

一八七一年、日清修好条規と申しますが、日本と中国清朝が結んだ条約です。対等の条約と言われています。ところがその八年後、琉球処分というのがあります。これは琉球を日本が沖縄県にした。それまで琉球王国といって半ば独立していたみたいな感じですが、日本に編入して沖縄県としました。

次は一八八二年に壬午軍乱、一八八四年末に甲申政変があります。これは朝鮮半島のソウルで起こった、日本と中

国の武力衝突。壬午軍乱のほうは、武力衝突に至りませんでした。なりかけ、みたいな感じ。甲申政変は実際に戦闘し、死傷者も出ましたが、全面戦争には至らず、とりあえず穏便に済ませたのですが、十年後の一八九四年には、穏便には済まされなくなって、日本と中国の間で戦争が起りました。

この流れにそって、わたしの世代が教科書で、あるいは学校の授業で習った日中関係史のストーリーができました。日清修好条規というのは、日本と中国が対等の関係です。日本の明治維新だとか、中国のアヘン戦争というのは、西洋から不平等条約を押しつけられました。そういう事件がありましたから、いじめられた者どうし、日本と中国は対等な条約を結んだ、とても友好的な関係、美しい条約であるところが、日本はどんどん西洋に毒されて、帝国主義化をしていって、中国にケンカを売って戦争に至って、……というストーリーです。

この歳で、それがウソだとわかりました。もちろん真っ赤なウソだとは思いません。日本が力をつけて大陸進出していったことは事実でございます。

(3) 関係悪化と朝鮮半島

でも、たとえば日清修好条規は、美しい条約だとはいえないですね。日清修好条規は、中国側の李鴻章がつくったものです。その中に「日本と中国はお互いの土地を侵略し合わないようにならねよう（両国所屬邦土、不可稍有侵越）」と明記した条文があります。「お互いの土地（所屬邦土）」といいますが、実は李鴻章は朝鮮半島まで含めている。朝鮮と中国は違う国ともいえませんが、確かにこの条文の漢字を見ると、朝鮮半島を含むような意味合いで書いてあります。

ところが、日本人はそれが読めない。日本人も漢字使ってますけど、日本語の漢字と中国語の漢字は全然意味が違ったりしますし、先ほどのパーセプション・ギャップもありました。当時の日本人は、国際法・西洋のやり方でしたか物事を考えられないんですが、かたや中国は、変わらんでもええやん、と思うてる人たちですので、それまでのやり方でやります。

中国側で何が怖かったかと申しますと、豊臣秀吉が朝鮮出兵をしました。「朝鮮出兵」とは言ってますが、あれは日明戦争でございます。中国の軍隊が来て、それで日本と

戦っていたわけです。つまり朝鮮半島は、中国、とくに北京という土地柄にしますと、絶大な地政学的重要性を持っているところですね。これは日本列島のわれわれは、たぶん死んでもわからない感覚です。

ただ、日本人にも似たような感覚がないわけではありません。たとえば朝鮮半島にまで、中国とかロシアとかの勢力が入ってきたりすると、それは元寇の再来であるという危機感は、戦前の日本人は持っております。

今は持っていませんね。「あの朝鮮半島って……」みたいな感じがありますが、これは日本人が平和ボケしているからです。それも実は、在韓米軍がいてくれるから、のほほんとしていられる。明治のころは在韓米軍がいませんから、決してそうじゃなかったということがございます。

今みてきました事件は、実はすべて朝鮮半島を中国側が確保しておきたいという安全保障上の利害で一貫した事件でございます。「琉球は沖縄やん」と言いますが、琉球というのは、そもそも中国の「属国」といわれる国でございます。それを日本が何の言われもなく、中国に何の断りもなく、勝手に自分のものにした。琉球と同じ「属国」という地位の国が、実は朝鮮半島だったので、しかも日本は豊

臣秀吉のころ朝鮮出兵という前科がありますので、朝鮮半島も日本がまた自分のものにしてしまうかもしれないという危機感が、このとき高まったんですね、中国のほうで。

なので、琉球問題と違ってますが、問題は沖繩ではなくて、朝鮮半島ですね。今、沖繩がけっこう、尖閣とか独立とかややこしいですが、それは中国側が海軍を持つようになってきたから、ややこしくなってきたのでして、このころはちがいます。

それで、朝鮮で実際に日中の武力衝突が起こるのもそういう文脈であって、それが戦争にまで発展するのが、日清戦争でございました。

(4) 日清・日露

その続きですが、この辺だいたい十年おきに事件が起こっていると考えていただくとわかりやすい。甲申政変から十年で日清戦争、日清戦争から十年で日露戦争という感じがあります。そして、いろいろ書いてあることは、全部延長線といえますか、つながっています。

「日清戦争と日露戦争は違うんですよ」と言う人もいらっしゃるかもしれませんが、同じです。日本の利害とし

ては、やっぱり朝鮮半島に敵対的な大陸勢力がいると困る、というので、日清戦争のときは、清朝が怖かったので押し返したんですが、今度はロシアが来たので、それを押し返さないかんという、それだけのことです。

逆に、朝鮮半島の北側にいわゆる満洲、さらには北京がございしますが、そこを支配している人たちからすると、朝鮮半島を押さえておかないと、そこが危ない、ということですので、朝鮮半島という地政学的な位置は、そういうことです。なので、清朝にしてもロシアにしても、朝鮮半島を押さえておきたいということで一貫します。そこで戦争が起こってしまふ。

いずれにも、日本が勝利したので半島と大陸が変わっていく、ということになっていきます。つまり、日本に負けたのが相当シヨックです、中国にしてはですね。ロシアに日本が勝ったというのが、またまたシヨックだったわけでした。日清・日露のあとに「変法」、法を変え、また「新政」、政治を新たにする、という事件がございますが、これがシヨックのあらわれです。

先ほど申し上げましたが、今までのやり方でいいやん、というのが中国側の基本的なスタイルですね。とりわけ北

方政治のほうでは、そうです。そうなんです、日本が中国に勝った。ロシアとかに勝った、というのはちよつと信じられなかった。

何で勝ったのかというと、それは西洋化したからです。ロシアは西洋で大国ということですから、じゃあどう違うのかというと、ロシアも日本も天皇とか皇帝とかいますが、日本は立憲君主制、ロシアは皇帝専制だと。皇帝専制というのは中国と似ておるので、日本のようにしたら強くなれるはずだと考えました。

「変法」と「新政」といいますのは、日本風な立憲君主制、立憲制にする。君主制かどうかはまた議論があります、とにかく立憲制は立憲制でやる。そう考えて政治が動き出すというのが、中国革命のそもそもの出発点でございます。

四 破綻

(1) 中国ナシヨナリズム

ですので、下関条約は台湾が日本の植民地になったりとかいう意味で、とても重要です。ですが、もっと重要といえますか、別に重要性のランクをつけてもしょうがないん

ですけど、より日中関係で注目すべきは、中国があんまり絡んでないポーツマス条約、つまり日露戦争の講和条約です。

そのポーツマス条約で、何が問題になるかといいますと、これはそれまでロシアが持っていた権益を、日本が引き受けることを決めたものです。つまりそれで、たとえばご存じの旅順・大連、このあたり、とくに大連はロシア人の町ですが、それを日本が取った。それから、ロシア人が敷いた鉄道の一部を、満鉄（南満洲鉄道）という形で日本が引き継ぎました。これがテコになって、日本は東三省、いわゆる満洲に権益を持つようになります。

この時、ちょうど中国は、日本のようにしたら強くなれる、と思っていた。つまり日本をモデルにして、西洋風に立憲制の国民国家をつくれれば、強くなれるんだ、日本に学べ、ということ、中国からたくさんの留学生が、日本にやって来ていました。

ところが、当の日本は何をしているかと申しますと、国民国家となるべき中国の一部である満洲に、植民地みたいなものを築こうとしておる、これは中国人には、非常に不本意だったということになります。満洲権益と立憲化。立

憲化というのは、日本化といいますが、近代国家化と言いかえてもあながち間違いいではないものですけれども、そこで日本に対する姿勢が難しくなります。日本をモデルとしなければならぬということ、日本というのは譲れないライバルであるということ。そういう非常に複雑な日本に對する思いができました。

当の日本は、と申しますと、それは中国に戦争して勝った、それでロシアにも勝ったということで、じゃあ中国なんか、それまでは学ばないといけなかったかもしれないけれども、当時の中国から学ぶものはない、とかいう形で中国蔑視が蔓延してくるようになってまいります。この点が非常に問題になってくるわけですね。

今に続くというと語弊があるかもしれませんが、中国の今に直結する形の反日ナショナリズムは、このあたりから始まっています。非常に日本に對して愛憎ないませ、なんというの、先ほど来、申し上げております、中国が多元的であることの一つのあかしではないかと思えます。

それに対し、日本のほうは一体化、単純明快ですので、中国蔑視となると官民挙げて蔑視するという感じになってまいります。この点、反日ということにも、それなりの相

乗効果がある。以後の二〇世紀の政治史と申しますのは、もはや日中対立そのものでしかないという感じでございます。

(2) 二十一カ条要求と日中対立

一九世紀の最末期・二〇世紀のほんの初めまでは、中国は日本に学べとか、日本モデルとかがそれなりにあつたわけですが、一九一一年・辛亥革命以降になりますと、いよいよ変わってまいります。日本に学ぶよりも、もっと学ぶべき対象、アメリカとかがこのころから、中国に對して異様な親密度を加えてくる。そういう条件もつけ加えないといけませんが、いずれにいたしましても、二〇世紀の、とくに辛亥革命以降になりますと、日中の対立はどんどん尖鋭化してゆく。

なかでも日本がポカをやったのが、いわゆる対華二十一条要求ですね。去年ちよど百周年だったかと思えます。山東省のドイツの權益をうけつぐとか、満洲の日本權益を期間延長するとか、……。これはあながち日本だけが責められるものでもないのですが、それにしても拙劣きわまりないのが、この時の日本の外交でして、そのあたりの

細かいことは、日本史の研究者が非常に詳しく解析をしております。⁽⁷⁾

その後、有名な五四運動がございまして、そのデモなんというのも、二十一カ条を日本が強要したことはありません。中国の反日ナショナリズムを増幅させる一つのきっかけになっておりまして、あるいはよくご存じのとおりかもしれません。

日本の大陸進出は、このように第一次世界大戦から、また激化をいたしました。こうしてそんな日本に抵抗する中国、という構図が定まってまいります。中国は国民革命とかが統一をしようとしても、その前に立ちはだかるのが日本となつてまいります。実際に、日本が満洲事変を起こして、それで対立をして、戦争になっていく形になりますので、これはたいへん不幸な歴史だろうと思います。

しかしそんな行動や事件ばかりではありません。そうした表に出てくる背後にある、それぞれの認識のギャップであるとか、あるいはその変化がありまして、そのことをお互いが相手を知らないというところ、ここに非常に問題があるかと思えます。

(3) 「同文」の実態

日中の人たちは当時、互いを「同文」の国とみなし、中国も日本に学べば日本のようになれる、と思ったわけですが、中国もそれでいろいろ試行錯誤しました、というか、今もしていますが、まだそうはなっていないと思います。

そこがまず認識のギャップの大きな点だと思っております。なかんづく「同文」とかいつて、日本が学びやすいとか、日本のようになれる、というのは、少し誤解ではないかということが挙げられます。

これは日本の歴史でも、非常に大きなポイントになると思われます。日本の江戸時代がかなり誤解されているような気がしています。

江戸時代、とりわけ一八世紀の日本は、非常に儒教が普及をいたします。いわゆる漢学、中国の学問ですね。日本人がござつて中国のことを勉強したというのは、実は歴史上これが初めて、江戸時代が初めてですね。

ごく一握りのエリート、貴族・お公家さんとかお坊さんは、もちろん中国を勉強していました。清少納言が『白氏文集』をととか、そういうのはあります。ですが、一般の人たちが『論語』をそらんじるとか、寺子屋でたたき込まれ

るとか、そんなふうになったのは、ようやくこの時なので
す。

ところが、じゃあ漢学を勉強しまして、それで中国のこ
とをよく知るようになったかといいますと、全然そんなこ
とはありません。たとえば文字が読めるようになったとか、
漢字が使えるようになったことと、中国を知ることというこ
とは、全く別のことです。

何かりテラシーがついたとか、学問ができるようになって
たとかいうのは、当時からあるわけです。ですが、じゃあ
中国のことを知るようになったか、というと、必ずしもそ
うではありません。

しかも日本人は、漢学とか、漢籍に書いてあることは、
どうも信用ならんと言いました。それで乗りかえるわ
けです。蘭学とか国学とかをやったほうがええ、西洋・日
本のことをやってたほうがええで、となつてきました。
ちようどそのときに黒船がやってくるわけです。

漢語でいろんなことが言えるようになって、日本人はリ
テラシーが急速に向上し、非常に知的にはなつたんです
だからといって「中国化」したとか、中国のことをよく知
るようになったか、といえは、それは全然そんなことはあ

りません。儒学の造詣に多少深くはなつただけ、というのが、
実は一八世紀から一九世紀の日本の姿でした。それで以後
は、西洋化まっしぐらという形ですね。⁽⁸⁾

(4) 梁啓超

かたや中国のほうが、日本モデルということと、一九世
紀の終わりから二〇世紀の初めにかけて、留学生を派遣し
たりして一生懸命、日本のことを取り入れようとしています。
しかしそれは日本語で書かれた、あるいはもう少し言いま
すと、日本の漢字で書かれた西洋のことを中国は学ほうと
しているだけの話であつて、日本に來た留學生が当の日本
のことを知つて歸つたかということ、やつぱりそんなことは
ありません。

典型的な人をご紹介します。梁啓超です。日本人に
はあまりポピュラーではありませんが、ご存じの方もい
らっしゃるかもしれません。この人は日本でいうと、たと
えば三宅雪嶺と徳富蘇峰を足して二で割らない、足して倍
するとか、それぐらいの筆力と影響力を持ったジャーナリ
ストでございます。

この人が政治上の争いで破れて、日本に亡命してきまし

た。それで、否応なく日本の本を読まないといけない。自叙伝には、日本の本を読んでもと、「思想が一変した」と書いています。

つまり中国で、西洋のことを中国流の書き方で書いてあるものを何ば読んでもようわからなかった、日本あるいは西洋のことは全然伝わらなかったんですが、日本で、日本の漢字で西洋のことを書いてあるのを見ると、とてもよくわかる、あるいは考え方がガラッと変わったというのです。そこでかれは、日本の漢語とか日本流の文体で西洋の事柄をどんどんと中国のほうに発信をしていって、なかんづく若い人たちの考え方を、日本化、西洋化の方向に向けていったのでして、たいへん重要な人物です。

ところが梁啓超だけではなくて、当時の人たちほとんどだといっていると思いますが、その人たちが日本のことをどれだけ知っているか、それは非常に心許ないと思っています。

(5) 関係の緊密化

それとほとんど同じ時期になるわけですが、一九世紀末の日本は、先ほど申しました江戸時代からの流れで、人の

交流とか貿易とかはしていますが、中国とは経済的にそれほど重要な関係にはなかった、むしろ日中関係は政治的で、日本が西洋モデルを振りかざし、以前のままの体制で臨む中国と、朝鮮半島をめぐる軍事的、政治的に争いました。いわば中国の北のほうと日本が争っている関係でした。

日清戦争が終わりまして、日本は賠償金も得て、いつもの欧米化をいたします。その一環が産業革命ですね。時期としては、一九〇〇年代が中心です。その産業革命でできた工業製品をどこに売りましようかという話になります。ターゲットは中国市場だったわけですね。中国に日本でつくったものを売り込もうという形で、実は産業革命が進んでいきます。

そのさい日本は、中国のことを知らねばならないはずですが、実は先ほど申し上げたような形ですね。漢学をやつて、漢学の先生はたくさんいる。けれども、中国の実地のことはよく知らない。しようがないので、商社で赴任した人たちが、現地で見場のことを学ぶ。だからそういう人たちは、経済とかローカルなことはわかりますが、中国全体がどう動いているかは、全然わからない。そういう形

になってくるわけですね。

そのうちまもなく、今度は逆に、中国の工業化です。先ほど中国は一六世紀に工業化したと申しましたが、その時は手工業でした。今度は機械制工業です。

一九二〇年代あたりに、中国はその工業化をいたします。綿製品を機械でつくるようになりました。その際に、何でそんなことができたかと申しますと、実は日本からの技術移転であるとか、日本の企業が中国に生産拠点を移したとか、そういうことが主動力になっています。もちろん「民族紡」という中国人自身の資本でつくったものもあります。

グラフ（図6）をご覧くださいますと、非常にざっくりで、くわしい説明ではないですが、機械製綿糸の動向がわかります。機械製ですから産業革命で出てきたものですが、はじめは輸入しかしていません。国産はありません。綿糸はもちろん作っているのですが、機械製の綿糸はないということです。

一八九〇年代からだんだんとつくり出すようになります。が、まだまだ輸入分が圧倒的です。ちょうど日本の産業革命がこのあたりから始まって、中国にどんどん売り込んだ

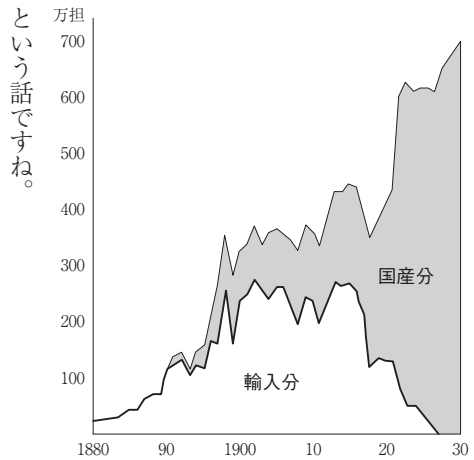


図6 機械製綿糸の供給

出所：森時彦著『中国近代綿業史の研究』（京都大学学術出版会、2001年）11頁。

二〇世紀に入ってから、一九一〇年代・二〇年代に爆発的に国産分がふえてくる。こうしてついに一〇〇%、一九二〇年代の間に輸入綿糸をほぼ駆逐して、中国で自前の機械製綿糸がつけられるようになった。これを中国の産業革命といっています。

いちおう国産分といっていますが、この中には日系企業がたくさん入っている。当然のことながら、その日系企業でたくさんの中国人が働いている。中国人が着るものをついています。ところが、それが日系であるというだけで、

たとえば中国ナショナリズムの「反日」の対象になって、排斥されてしまうということが、二〇世紀ではよく起こることになります。⁽¹⁰⁾これは最近、少し前にも起こったことではなかったでしょうか。

(6) 「小日本」

石橋湛山という人は、そういう動きを目にあたりにして、発言をくりかえした人物です。『東洋経済新報』（現『東洋経済』）という今もつづく経済誌の主筆、ジャーナリスト・エコノミストで、後に総理大臣にもなりました。

そのかれの唱えた意見が「小日本主義」です。つまり大陸への進出をやめろ、と言うんですね。大陸に進出しても経済的にいい効果は全くないので、植民地とか全部放棄してもっと儲かるはずや、という言説であります。これは今でも大きな権威がありまして、どうして日本は「小日本主義」の道をとれなかったのか、とよく言われます。⁽¹¹⁾

ただ、石橋が言っていることは、純経済的な観点だけで、国防とかには及んでいません。ただ、結局のところ日本は戦争に負けて、植民地とか経済権益も全部取られて、結果

的に石橋が言っていたような「小日本」になって、しかも経済大国になったわけですので、これが正しかった、という感じになってしまいます。そこから、いわゆる経済人たちには、この「小日本」主義といえば、誇らしいことばになります。

同じ「小日本」でも、今の中国の人にいわせれば、「小日本」ですから、悪口になります。中国人の悪口は、われわれは誇り。なので、ぜひそういうふうに言うようにしましよう、とは、悪ふざけでございますが、しかし「小日本」であるかどうかというのは、あまり関係ない話でございます。まして、何を申し上げたいかといいますと、同じ事物・概念を共有しながらも、日本の考え方と中国の見方がまったく逆、かけ離れているという点でございます。

日本と中国の経済関係があつて、いわば非常に密接になってくる。とりわけ二〇世紀に入り、その前半。これは経済権益とか植民地とか、政治面のいろんなことも絡み合いながら、経済的には日本と中国は切っても切れない間柄になってきました。

にもかかわらず、当然のことながら、以前からの流れがございますし、二十一カ条要求のような外交上の愚かな振

舞いも相乗効果で、政治的には日本と中国はたいへん険悪になってきました。ここが非常に問題でして、つまり政治と経済というのが一致していないわけです。

日本人は官民一体といいますか、経済発展でもそうですが、政治と経済はほとんど一体化して、経済人は政治家に頼りたいし、政治家はすぐ経済人に命令をします。日本の場合は政治、経済一体になっています。ところが、中国側は全然違う。これが「政冷経熱」の根源的な構造になっているんじゃないかというのが、歴史から見た日中関係のありようではないかと考えております。

おわりに

(1) まとめ

そろそろ、まとめをさせていただきたいと思います。はじめに申し上げておりました、それこそ冗談的な会話で、最近の日本と中国との関係、「政冷経熱」は昔からあったんですよ、ということも、それなりの系統的な説明をしたつもりでございます。

第一に、日本と中国それぞれの基本的な認識がありました、要はそれがびったり合わない、日本が中国に、あるい

は外に對して考えていることと、中国が外に、日本に對して考えていることとの間に、大きなギャップがあったという事です。

いまひとつは、史実の事例です。重要な出発点として、一六世紀から一七世紀にかけての倭寇という現象です。これがたとえば「政冷経熱」、「冷」というよりは、政治上対立し、紛擾を起こすとか戦争をするだとかいうことです。経済的には非常に深いつながりがあるという典型例になるでしょうか。

それを何とか平和に、という形で転換をしたのが、一八世紀の、いわゆる日本で言う近世、江戸時代ですね。中国では清朝時代であります。これは政治のほうですね。あるいは、認識のギャップをぶつかり合わせると、関係が抜き差しならなくなるので、それまでの倭寇とかも踏まえた上で、政治的な関係は、お互い抜きにして、経済的な関係、経済ベースだけで関係を持つ、結び合うというようにすれば、何とかうまくいくのではないかと、そういう平和な関係に入ったという事です。

それを経まして、出発点の再現になったのが、二〇世紀前半の日中関係、あるいは日中戦争の事例になります。こ

れを四百年も隔たった倭寇の再現というと、突拍子もない、学者にあるまじきアナロジードと言われそうです。確かに置かれた諸条件とかプレーヤー、アクター、主体は全く違います。しかし非常に大づかみな枠組みの構造では、あえて同じだと申し上げたいと思います。

日本列島が一六・一七世紀、非常に経済発展をし、富強になった。経済発展だけではない、戦国時代ですから軍事力も強まってくるんですよ。同じようなことが、近代の日本でもいえまして「富国強兵」ですから、そうした共通点が一つの背景になっております。

そしてそんな日本の方向と大陸が変容してくるのは、無関係ではありません。一六・一七世紀、大陸中国のほうは、北と南の乖離、政治と経済が分かれてきたのは、単に中国だけでできたことではなくて、日本とも深いつながりがありました。またその日本が近代、一九世紀の後半から半世紀もしないわずかの間に「富国強兵」、強国化したことが、中国にインパクトを与え、国民国家化・中国革命を促しました。

にもかかわらず、お互いが相手のことをどれだけ知っているのかというと、これは大いに疑わしい。上っ面だけを

見て、日本のようになりたいとか、あるいは中国蔑視をする、そうした歴史をたどってきました。

(2) 展望

地政学上、常にピボットといいますが、焦点になりますのは、朝鮮半島の問題でありまして、これは地政学的に大陸も半島も列島も引越せませんので、いたしかたないですね。仲が悪いなりに、どうやっていくかということ、われわれは考えないといけないと思いますが、その際にやつぱり歴史と、その歴史をもたらしめている構造を知っておくことが重要だろうと思います。

経済的、文化的には、相互依存関係はまちがいないわけですね。今もそうです。しかしながら、それぞれの社会のつくり方、あるいは政治のありようが、やはり日本列島の政治社会、それから大陸の政治社会というのは、これは同じ人間がつくっているものやから、まったく同じものができると、さるんや、といてしまおうと、全然ちがうと思います。

そういう相違というようなこと、あるいは、どこがどういうふう違うのかということをおろそかに始め知っておいた上で、はじめてキチンとした対話といえますか、関係が築

けるのではないかと思っている次第でございます。

そんな違いをあらためて一つだけ、最後に申し上げておきたいと思います。

日本はすぐ一体化する、もともと一元的ですね。なので多元化したいという思いがあつて、たとえば東京に対して関西・大阪、なんてすぐ言いがたがるんですが、それは日本人が凝集する、一体的であることの裏返しですね。

逆に中国は、メチャクチャ多様、多元的です。同じ中国といつても、違う主体が同時に並立併存しているみたいな社会でありまして、本日は北と南、政治と経済というざっくりした分け方にとどめていますが、その中で数え出したら、もつとグチャグチャ……。少し語弊がありますが、とにかくわれわれの想像を絶しています。なればこそ、政府は一党独裁でとか、勝手な思想言論は許さないとか、「一つの中国」じゃないといけないと言います。これは逆にバラバラであることの裏返しだと考えております。

歴史というのは、虚実交えた資料に書いてあることから、いかに当時ありのままの姿に迫るか、という学問でございますので、くれぐれも日本政府、中国政府が一方的に言っていることに惑わされず、歴史と現実とを自分の目でしっ

かりとご覧になって、お考えいただければ、と思います。

逆にいいますと、今日わたしが申し上げたことは、わたしと言つてるだけのことで、ウソ八百かもしれません。その辺はやはりご自身でいろいろと反芻し考えていただきたいと思ひます。

やっぱり中国は大きな隣国で重要ですから、どうつき合つたらいいか、ということも少しも考える足しになれば、これほど幸せなことはありません。

時間がまいりましたようです。これで終わりたいと思ひます。

〔附記〕 本稿は、二〇一六年五月二八日、大阪経済大学日本経済史研究所主催、黒正塾 第一四回春季歴史講演会「日中関係を考える―歴史からのアプローチ―」での講演内容に加除訂正をしたものである。

(1) 以下、講演内容の大筋は、拙著『日中関係史―「政治経熱」の千五百年―』P.H.P新書、二〇一五年にもとづく。また筆者がものした関連の一般書として、同『近代中国史』ちくま新書、二〇一三年、同『中国「反日」の源流』講談社選書メチエ、二〇一一年がある。いっそう学術的なテキストとして、拙編『中国経済史』名古屋大

学出版会、二〇一三年も参照。以下の論旨・論点には、以上の文献を逐一、注記することほししない。

なお以下に付した注記は、一般向きの講演記録という性格上、原則として、必要最低限の参照文献、しかもなるべく親しみやすく、入手しやすいものをあげている。

(2) そのあたりの研究状況については、さしあたり桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、二〇〇八年を参照。

(3) たとえば、杉山正明『クビライの挑戦―モンゴルによる世界史の大転回―』講談社学術文庫、二〇一〇年(原著は一九九五年)を参照。

(4) 一般向きには、たとえば永井晋『北条高時と金沢貞顕―やさしさもたらした鎌倉幕府滅亡―』日本史リブレット人、山川出版社、二〇〇九年を参照。

(5) たとえば、岩井茂樹『明代中国の礼制覇権主義と東アジアの秩序』『東洋文化』第八五号、二〇〇五年、檀上寛『明代海禁Ⅱ朝貢システムと華夷秩序』京都大学学術出版会、二〇一三年を参照。

(6) 内藤湖南『日本文化史研究』講談社学術文庫、一九七六年(原著は一九二四年)、内藤湖南著/礪波護編『東洋文化史』中公クラシックス、二〇〇四年などを参照。

(7) 最新の代表的な研究としては、奈良岡聰智『対華二十一条要求とは何だったのか―第一次世界大戦と日中対立の原点―』名古屋大学出版会、二〇一五年を参照。

(8) 渡辺浩『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、増

補新装版、二〇一六年(原著は一九九七年)。

(9) 梁啓超に関しては、さしあたり狭間直樹『梁啓超―東アジア文明史の転換―』岩波現代全書、二〇一六年、梁啓超著/高嶋航訳注『新民説』平凡社東洋文庫、二〇一四年を参照。

(10) いわゆる中国の産業革命をめぐる綿工業展開の詳細については、森時彦『中国近代綿業史の研究』京都大学学術出版会、二〇〇一年を参照。

(11) 石橋湛山については、おびただしい研究があつて、枚挙に暇ない。もつとも、少なくともその中国観の考察は、いずれも正鵠を射ているとは思えない。さしあたって、その代表的な論著を集めた石橋湛山著/松尾尊兌編『石橋湛山評論集』岩波文庫、一九八四年のみあげておく。

(おかもと たかし・京都府立大学文学部教授)